



パック連通信

No.108 2017年3月10日発行

全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

事務局：東京都中野区東中野 4-6-7 東中野パレスマンション 201 TEL 03-3360-1098

第10回 環の縁結びフォーラムを開催

テーマは『求められる飲料用紙パックのあり方とそのリサイクル適性について』

昨年11月1日、TKP市ヶ谷カンファレンスセンターにて、10回目となる「環の縁結びフォーラム」を開催しました。昨今、飲料用紙パックの形状・素材、またサイズや中身においても、さまざまに変化し、バリエーションが多様となってきています。一方でリサイクルの側面から検証することも必要です。紙パックの最新の動向を踏まえて、今後の紙パックの環境性・リサイクルについて考えてみました。今号は、このフォーラムの特集をお届け致します。



●主催者挨拶

全国牛乳パックの再利用を考える連絡会

代表 平井成子

本日はお忙しい中、環の縁結びフォーラムに多数ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。今回のフォーラムは、今飲料用紙パックに求められていることは何か、そしてそのリサイクルについてはどうなのか、という事をテーマに致しました。

今年(2016年)の6月と9月に、ヨーロッパと北米のリサイクル現場を視察する機会をいただきました。現地のスーパーの紙パック製品も見ましたところ、だいぶ紙パックの形状が変わってきているなと思いました。消費者にとって、使いやすい紙パックの形状が求められてきているのだらうと感じたわけです。これは、いわゆる進化だらうと思います。ただ、リサイクルする時にどうなのでしょう。消費者は従来の形状の紙パックを洗って、開いて乾かし

てという手間をかけてリサイクルに出していますし、その回収ルールを私たちパック連が先立って運動として進めてきたという事もございます。今後紙パックの形状が変わっていく時に、リサイクルについてどのように消費者に説明していったら良いのか、悩ましい現状があります。やはり、一度紙容器メーカーさんや、その紙パックを選択している中身メーカーさんにお話を伺いたいと考え、今回のフォーラムを企画いたしました。

欧米のごみの中から資源物を取り出すという現場の視察を通してつくづく思いましたのは、洗って開いて乾かしてという手間をかけている日本では、環境衛生の良い中で紙パックが集められ、それが高い資源価値を生み、もう一度再生商品として戻ってきている、しっかりと目に見える形で資源循環がなされているということです。これを誇りにして日本方式ということで定着させつつ、海外に向けて、このような良い方法で日本はリサイクルが行われているという事を発信していくべきではないでしょうか。

本日、紙パックに関わる方々の多くのご参加をいただきましたが、皆様方一人ひとりがこれからの紙



パックリサイクルの行く末を真剣に考えていただく機会にしていただけでしたら幸いです。

●来賓挨拶

全国牛乳容器環境協議会 会長 青山和夫氏



全国牛乳容器環境協議会、約して容環協は牛乳メーカーと紙パックメーカーからなる事業者団体ですが、全国パック連様にはリサイクル講習会や出前授業などの啓発活動で一緒にさせていただき、この場を借りて厚く御礼

申し上げます。

容環協では、飲料用紙パックリサイクル行動計画「プラン 2020」を、今年 2016 年 4 月に策定致し、紙パックのリサイクルが継続的に進むよう活動しております。行動計画の目的である、環境負荷が少ない社会、一人ひとりが環境を考え行動する社会の実現に向けて、一つ、回収率を高める。一つ、紙パックの環境特性を正しく伝える。一つ、環境を考え行動をする人々を増やす、という事に努めております。

2015 年度の回収率については、現在、集計中ですが、2014 年度の使用済み紙パックでは 35.7%。工場損紙等を加えても 44.7%と、目標である 50%に達しておりません。一方で、昨年度に実施した首都圏でのインターネット調査によれば、家庭で主に消費されている 1L 紙パックについて、約 60%の市民の方々が分別排出していると回答されていますので、回収率はもっと高くなって良いように思います。私達が知らない、気づいていない回収ルートがまだあったり、雑がみへの混入排出が増えていくと捉えて、これらを把握して数字を積み上げていく事が、当面の重要課題だと考えております。

本日のフォーラムは、全国パック連様と長年関わってこられた方々や、各方面で連携されている皆様と意見交換できる大切な機会でございます。また、私共容環協に対し叱咤激励をいただける場であると考えております。紙パックを通じたりサイクルの環が、これからも一層強固なものになるよう祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

●パネルディスカッション前半

求められる飲料用紙パックのあり方とそのリサイクル適正について

1. 日本製紙(株) 紙パック事業本部

紙パック技術部担当部長 金崎誠一氏

日本製紙の概要を簡単にお話しさせていただきます。ご存知のように、日本製紙は、元々は紙会社でございますが、現在は「木とともに未来を拓く総合バイオマス企業」というメッセージを掲げまして、紙や木に関連する様々な事業の展開を図っています。紙パックに関しては、全国に 4 つの工場を持ち、皆様に安全安心な製品を提供することを基本に生産活動に取り組んでいます。

安全安心な製品を提供する為に、幾つかの施策をとっており、その一つとして食品安全システムの規格である FSSC22000 を取得しています。乳業メーカー様では先行して取り組まれておりましたが、容器に関する規格も出来ましたので、2014 年度から取組を開始し、2016 年春には全工場で取得を完了しました。また、フードディフェンスの徹底や 5S の強化も施策の一環として取り組んでおります。

牛乳容器のゲブルトップは製品の原型が出来てから 50 年が経過しましたが、基本的には大きな変化は起きていませんでした。これにより、昨今はペットボトル等にとって代わられるところも出てきており、我々も新しい機能を付加しようと、口栓を付けた新形状の容器を市場に投入することにし、幾つかを発表させていただきました。

また、アメリカのウェアハウザー社から液体用紙容器原紙事業を譲り受け、今年の 9 月から日本ダイナウェーブパッケージングという新しい関係会社として営業を開始しています。これによりまして、原紙抄造から印刷・加工そして充填機まで一貫体制を確保したトータルシステムサプライヤーとして、さらなる付加価値をお客様へ提供していくことが出来ると考えています。

リデュース・リサイクルの推進に関して



は、リデュースについては他の容器メーカー様と一緒に原紙の低坪量化に取り組んでおります。リサイクルについては、アルミの代わりに特殊なフィルムを使って製造した「ノンアルミフジ」を2014年に上市し、牛乳パックと同じリサイクルシステムに乗せる事が出来る環境配慮型製品としてご利用いただいております。また、紙パック回収率向上を目的として、グループ各社で様々なキャンペーンを定期的に行っております。

2. 凸版印刷(株) 生活・産業事業本部 事業戦略本部 環境ビジネスチーム担当部長 植松正浩氏



凸版印刷は、創業が1900年という事でございまして、116年の間、商いをやらせていただいております。彩の知と技、印刷テクノロジー、これを核としまして、情報コミュニケーション分野、生活産業事業分野、そしてエレクトロニクス事業分野という3分野で事業を展開しております。生活産業事業分野でパッケージと建装材、それからエネルギー関係を手掛けております。

凸版のパッケージング事業ですが、中でもGLフィルムという商品がございまして、蒸着・コーティング技術を元に開発した透明バリアフィルムです。この、GLフィルムをどんどん活用していこうという中で、「カートカン」という商品がございます。アルミを使わずに常温流通を実現した小型容器です。特徴としては間伐材を含む国産の紙を使用しており、日本の森林保護にも貢献しているという事になります。アルミを使っておりませんので、紙パックマークのついた飲料用紙パックという分野になり、排出のルールも「洗って開いて乾かして」と牛乳パックなどと同じルールをお願いしております。工場損紙につきましては、家庭紙メーカーさんをお願いして、トイレトペーパーに再生し、社内で使用しております。

それからもうひとつ、EPパックという商品がございます。こちらも液体容器ですが、アルミを使用

しているものと使用していないものとがございます。アルミを使用しているものは「紙製容器包装」、ノンアルミの方は「紙パック」という分類になります。素材と中身によって、アルミ付きかノンアルミか選択が変わり、それを消費者の方々にどうやって説明して分かっていただければいいのか、という事が悩みどころでございまして、まだまだ啓発活動が不足しているのかなと思います。

また、お酒のパックですが、従来より「洗って開いて乾かして」を推奨する意味で、こういった展開方法の図をパックに入れておりますが、実際に組成分析などをやってみますと、だいたいお酒のパックは潰された状態で排出されているケースが多く、開いて出されているというのは殆ど見たことがありません。そうした中、今年開発しましたのが「オルカット」という商品です。まさに折ってカットする、というオルカットなのですが、トップの角から10ミリぐらい下のところにミシン目が一周入っております。そこを折り畳んで前後に何回か折ると、そのミシン目のところから手で切り取ることができるという仕組みになっています。当然、輸送中や飲んでいるときにピンホールや穴が開いてはいけないうえ、そのあたりは作り方で工夫している訳ですが、リサイクルする時に、口栓部分からハサミで切り開いていただくより、ずいぶんとやり易くなるのではないかとこの事で開発しました。こちらは、宝酒造さんの松竹梅でご採用いただきまして、今年発売していただきました。

今後も、こうしたリサイクル適性を考慮した容器を引き続き開発していきたいと考えています。



3. 大日本印刷(株) 包装事業部包装第3営業本部 シニアエキスパート 國弘武嗣氏



大日本印刷の概要なんですが、創業が1876年、本社が市ヶ谷で資本金は1144億円程度。売上高が1兆4500億円。従業員は連結で3万9000名程おります。事業分野は三つ、情報コミュニケーション、生活・産業、エレクトロニクス製品になります。企業理念は、人と社会をつなぎ、新しい価値を提供する、となっています。

包装における設計指針という事で説明させていただきますと、製品へのやさしさ、機能の調和、エコロジー。これら全てが満ちているという事でUSE-FULLと、そういったパッケージを目指すという事でつけられた言葉です。エコロジーを更に説明しますと、環境対応五原則というものを掲げており、リデュース・リユース・リサイクル・サステナビリティ、環境負荷の軽減という事になります。

まずはリデュース。パックの原紙の坪量削減は、かなり以前からやっております。例えば、2Lのカートンですと1枚当たり3.5%くらい削減しているという実績がございます。また、IB-PETというハイバリア透明蒸着のフィルムを持っており、酒パックのアルミ箔レス化等にこのIB-PETという透明蒸着のフィルムが多く採用されています。IB-PETの採用で、エネルギー消費が46%、二酸化炭素CO₂の排出量が約50%ダウンになるというのが計算上分かっております。

次に、リサイクルの取り組みという事で易リサイクル化。十何年前から取り組んでるやり方が、易剥離カートン。口栓のトップの部分に対角線上に開けて、その後、内面のフィルムが取れるようになります。フィルム側にキャップが付いて、キャップと一緒に取れると。消費者がハサミを使わず、容器を洗わずに解体でき、リサイクル面積が大きくなる。そして、臭いが移らずにリサイクルが可能だと。再生紙メーカーさんでの歩留まりも上がるんじゃないかというような期待も込めております。残念ながら

まだ、世の中には出ておりません。

また、もうひとつのリサイクルの取り組み事例としましては、自分達が出した資源を自分達で使う目的で、資源循環型のコースターと言われている物を作製しました。関西の液体容器工場で発生する損紙を再生紙メーカーさんに引き取っていただき、パルプ化して抄紙して我々の印刷会社で受け入れて、コースターを作って循環させたという事例になります。この時に、単純に紙を作るのではなく、トレーサビリティの確保として森林認証を意識しようという事で、FSCのリサイクルという認証も取得しました。

最後に、LCAの取り組みです。自社製品の環境負荷の数値化は、非常に大切だと考えておりまして、弊社では、20年前からLCAの取り組みを行っております。かなり歴史的には古いんじゃないかと自負しております。最近では、LCAに限らずLIME、これは、その先の環境影響まで広げて考えて指標化するという考えなのですが、こうした活動にも参加しております。弊社が開発した製品についての評価を万遍なく行ない、環境負荷を必ず確認するというような体制を社内で整えています。

4. 日本テトラパック(株) 環境部 マネージャー 金井路也氏

テトラパックは、世界中で1,840億個のパックを消費者の方々に提供しています。日本では、57~58億。営業拠点は世界中に80営業所、ビジネスとしては170カ国以上で展開しています。販売会社は、32社で、日本もその一つでございます。R&D(研究開発施設)も、日本では御殿場にあります。従業員は約2万4,000人弱。パッケージだけでなく、充填機、その前の食品加工機のシステム等もビジネスしているトータルソリューションプロバイダーです。

日本市場の紙容器という事で、テトラクラシックと呼んでる四面体の容器の登場、その後1969年くらいに屋根型の容器も登場しまして、1970年に常温で流通できる紙容器、



2000 年くらいからキャップ付き、2013 年になりますと、粘性の高い飲み物にご利用いただけるような容器も出てきました。市場に様々な形状を出しておりますが、一番大事なのは、お客様のご要望でございます。四つを考えておりまして、一つは、システムコスト。次に機能性であるとか差別化。次に食の安全。そして環境面。事業者としてここはしっかり守っていかなければならないという事を認識しております。

紙容器メーカーですので森林資源に頼っております。製紙会社で適切に管理されたものを製紙していただき、それを私どもがしっかり容器設計をして、工場でお客様の仕様に合わせた包材を印刷し、ラミネーションをかけています。世界中の全工場で ISO14001 を取り、環境配慮をやっています。環境施策には、大きく三つの目的を掲げており、一つ目が環境負荷の低減。具体的には、2020 年までに温暖化ガスの排出量を 2010 年レベルに抑えること。二番目の目的としましては、持続可能な製品の開発。再生可能な素材の中でも、まず一つ目は原紙。FSC 認証の原紙を 100% にしようという事で活動しています。更に、100% 全てが再生可能な素材を使っている紙容器。容器としての機能を再生可能な素材だけで提供していく事を目指し、現在開発しているという事でございます。三つ目は、リサイクルの拡大。日本の場合、再生紙会社がしっかり安定して受入れをしているので、消費者認知度を高めてリサイクル率を上げていく必要があります。世界中を見ますと、アフリカやインド等インフラ自体がないような地域では、インフラ作りにも世界では協力させていただいております。

未来に向けてどの様な容器になっていくのか、その一つの例として、紹介させていただきます。バイオベースのテトラレックス。植物由来の素材だけを使った屋根型の紙容器です。実は 2014 年に北欧のある乳業様にご採用いただき、いろいろな賞を世界でいただいています。ヨーロッパの屋根型容器はかなりの比率でキャップが付いてますので、枯渇資源からのプラスチックではなくて、バイオ素材のキャップを使い、ラミネーションもバイオ由来のポリエチレンを使っています。また、FSC の原紙を使っているという事で、ある意味、究極の紙容器に一步近

づいている容器と考えています。日本ではまだこれからですが、少しずつこういった物が売られていけば、持続可能な社会に近づき、そこに貢献していけると考えています。

5. 雪印メグミルク (株) CSR 部 CSR 推進グループ 担当部長 岡本政也氏

雪印メグミルクグループについてですが、事業内容は 4 部門での構成です。乳製品、油脂・マーガリンそういったジャンルと飲料、デザート類、メグミルク牛乳でありますとか Dole という天然果汁等になります。そして、不動産賃貸、共同配送センター。大手コンビニエンスの共配センターの運営、飲食店・売店。そして飼料、種苗となります。企業理念は、三つの使命を持っています。消費者重視経営の実践。それから、ミルクにこだわる。そして、酪農生産への貢献といった事になります。

当社保有の乳酸菌「ガセリ菌 SP 株」、これは内臓脂肪を減らすという知見が得られまして、機能性表示食品になってます。お陰様で非常に評価をいただきまして、売り上げ等が上がりまして、平成 28 年 3 月期は、前年から 5% 程伸びる事ができました。

次に、日本乳業協会の容器包装のガイドラインをご紹介します。一点目は、食品の安全性を保証する保護機能。二点目は、あらゆる場所で利便性の高い扱いが可能な利便機能。三点目は、消費者の皆様に分かりやすく、適正な表記を有する情報機能となっています。他に四点あり、容器包装自体それが人、物への安全性の確保。五点目が、必要量に応じて供給調整可能な生産適正。六点目が、消費者の皆様になんていただける経済性。七点目が人に優しく省資源、省エネ、リサイクルなど環境負荷低減に配慮する社会・環境性となっています。

現状のゲブルトップの紙容器というのは、この全てにおいて非常に優れているというふうに私は思っていますが、利便機能については、昨今の環境変化の中でさらにプラス



したものが求められている部分もあるのかなと考えています。

こういった事を踏まえた容器素材の指針のひとつとして、飲料用紙容器原紙の軽量化。これについては容器メーカーさんの方からありましたが、それと合わせて使用済み紙パックのリサイクルを推進するという指針をまとめて公表しております。具体例としてゲーブルトップ全体で1%の紙使用量削減を目指しています。当初の目標というのは、平米あたり316.5gから291gという事で、2割弱で非常に高い目標を設定したのですが、最終的には305gとなり、市場テストを実施し順次切り替え、2012年5月から全てを切り替える事ができました。

最後に、雪印メグミルクが個社として取り組んでいる内容をご紹介します。一つはCSR情報。いろんな取り組みであるとか、ホットラインの仕組み、人権に関するテーマ、それと環境テーマ。これを毎月全事業所と主要グループ企業に作って送っています。具体例としては、容環協での活動だけでなく当社としても独自の活動にも取り組んでおり、全国工場長会議で紙パックリサイクル促進について話をし、牛乳パックを使用していない乳製品工場にも牛乳パック回収ボックスを設置しています。工場内事務所では、市民の方にはいろんな啓発をさせていただいてまして、例えば九州コミュニケーションセンターでは、夏休みに留守家族子供会などを訪問し、容環協の子ども向け啓発DVDの視聴や紙パック工作教室等で、紙パックの容器としての素晴らしさとリサイクルの大切さを学んでもらっています。

最後に、私から社内に向けたメッセージを紹介させていただきます。「今後、いろいろな場所で新たな紙パックリサイクルの取り組みが増えていく事を期待しています。例えばパネルで『紙パッククイズ』を行い、回答者へ容環協のトイレットペーパーを差し上げるといった簡単なイベントは、基本的には費用負担なしで実施可能です。また、みなさま一人ひとりも日ごろの生活の中で周りの方達へ、紙パックの資源としての価値やリサイクルの大切さを少しでも伝えていただければ幸いです。」以上です。

●パネルディスカッション後半



【モデレーター】

(株)ダイナックス都市環境研究所 代表取締役 山本耕平氏

【パネラー】

環境省 廃棄物・リサイクル対策部リサイクル推進室 井上雄祐氏

日本製紙(株) 紙パック事業本部 金崎誠一氏

凸版印刷(株) 生活・産業事業本部事業戦略本部 植松正浩氏

大日本印刷(株) 包装事業部包装第3営業本部 國弘武嗣氏

日本テトラパック(株) 環境部 金井路也氏

雪印メグミルク(株) CSR部 CSR推進グループ 岡本政也氏

進行 各事業者の取り組みを聞いていただきましたが、環境省の井上さんにコメントをいただけたらと思います。

環境省 各企業それぞれの立場でご努力され、新しい容器、充填の部分を工夫され、市場に投入し、市民の皆様を選んでいただけるようにしているという力強いお話をいただきました。市民に分別してもらって、自治体の方で回収をして、そしてリサイクルをする事業者の方に引き渡してリサイクルしていく、その前提となる企業の皆様の取り組みによって消費者の手元に届くというような連携共同の仕組みとなっております。

5月に容器包装リサイクル制度の見直し検討ということでひとつの結論が出まして、ざっくりと申し上げると、いろんな課題があると。概ね容器包装の取り組みは前に進んでいるけれども、まだ種々課題もあります。課題をしっかりと見据えた上で、取り組みを進めていくべしというような事が全体としての方向性となりました。

企業の取り組みを市民の皆さんにご理解いただいたり、市民の皆さんが悩んでいる事を率直に、製品の開発をされている企業にお話をされたりと、こういったコミュニケーションを図っていく事を通じて、3R、リサイクルというものがもう一段高みの方へいくと。そうした相互連携の必要性というものを指摘されていると理解しております。

市民の皆さんが協力をして綺麗に分けて出してくれるというようなところは日本だけと、世界に誇れるようなものもごございますので、少しでも前に進めていくように我々も努力をしていきたいと思えます。

パック連 環境省さんへの質問ですが、先日、農水省の方から、回収率を上げるんだったら手っ取り早く洗わないで回収する方法って考えられないのというようなご発言があったんですね。洗わないで技術革新で収集した方が早いんじゃないかという考え方は、国の方ではどの程度それを許容してるのでしょうか？。

環境省 率直に私は申し上げたいと思えますけど、現状のこの分別のルールからすると、洗わなくてはいけないというのがルールです。環境省が分別の基準というものを定めてまして、その中で洗って下さいということが書いてあります。洗うということが回収率の妨げになっている、というようなお話が本当にあって、問題は、洗わなくてもその後ちゃんとリサイクルが出来るか。結果的に洗わなかったが故にリサイクル出来なかったという話になると、これはそもそもシステムを作った意味がない事になってしまいます。我々の方も新しい技術、それは今日の企業の皆さんからのお話にもあったような製品の技術でもありますし、それを回収しリサイクルする為の技術、こういったものも最大限活用して何が出来るのかしっかりと検証していきたいと思ってます。

パック連 日本製紙にご質問ですが、ウェアハウザーさんの原紙事業を譲り受けて、今後、白板を単に容器だけで展開されるのか、もっといろんな可能性というのを考えられて買収されたのか、どんな未来をお持ちなのかなというのがご質問です。

日本とアメリカ以外に白板の可能性というのがあるのか。もっと日本でどんどん特化して日本の中での白板での容器開発っていうのを考えてらっしゃるのか、お聞かせいただけたらと思います。

日本製紙 日本製紙と致しましては、紙パック事業をやっている製紙会社がトータルシステムサプライヤーとしてやっていくには、やはり原紙のところを持っておくべきと考えています。白板の用途としては、パッケージングの分野でもう少し広い展開ができるのではないかと考えています。現地には原紙マシンだけでなく、ラミネートの設備もありますの

で、更なる有効活用を図っていく所存です。

原紙についても、使用する側からの意見を取り入れやすくなるので、更に改善を進め、当社グループとなったメリットを発揮させようと考えています。

パック連 テトラパックさんのバイオベースのテトラレックス。再生可能素材という事で、一つ希望の持てる容器ではあるんですが、コストアップに繋がるんじゃないかと思うんですけども、中身の付加価値を高めて高く売ってその容器もコストアップ出来る可能性があるのかというのをお聞きしたいなど。

日本テトラパック 確かにコストアップすると思います。バイオプラスチックというのは非常に高い素材で、マーケットが限られてくると思います。今は市場も絞ってますし、価値を分かっていたく、価値をしっかりと伝える、そんな状況です。日本ではまだ、お客様にご提案できる状況ではありません。

進行 容器メーカーがここまで苦勞されてる事が、例えば中間で回収されてるスーパー等に伝わってるかどうか。容器メーカーの苦勞が、必ずしも反映されないという部分があって、やはりどういうふうに情報を共有していくかというのは結構重要な課題かなという気が致しました。消費者とか、リサイクル業者さんでもありますね。情報の共有が出来てるかどうかというのが重要だなと感じました。

軽量化や、剥離しやすい等進んでいるようですが、キャップは付けていいのか、外すのかというのはこれもまた問題で、沢山普及してくると今のシステムの中では外してもらわないと多分リサイクルのルートには中々乗らないですね。ちょっとくらいだったら良いよと言うのか、キャップが付いてると古紙屋さんは何て言うか、ちょっと教えていただきたいと思います。確かに消費者にとっては非常に便利だというお話ですけど、商品を開発される時にコミュニケーションを取られてるのか、あるいは、こういう事が必要だからこういう工夫をしたんだとか、そういう事について何かお話いただける事がありますでしょうか。

日本製紙 口栓の件ですが、キャップは外してリサ



イクルしていただければ良いのですが、ボディの方はそのまま出せば、トラブルが起きる可能性がある所も多いと聞いています。現時点では、当社から乳業メーカー様等に対して、口栓部分はハサミで切り取ってください、という表示を紙パックに入れるようお願いすることにしています。当面の間はそういう対応をさせていただき、口栓部分を簡単に外せるようなシステムを作り上げることも検討していく予定です。

雪印メグミルク テトラトップ容器の製品ですけど、問い合わせとか批判はほとんど無かったです。ただ、結果的にはリサイクルされずらいんだらうなという印象は持ってます。分別排出できるという事を見た目で中々わからないので、伝える義務があるのかなと。新しい容器をきちんとリサイクルしてもらう努力をするのが前提だなと考えています

日本テトラパック 容環協の中で、実はキャップ付きの紙容器に関するワーキンググループというものを、乳業さん、容器メーカーとで立ち上げてまして、そこでもいろいろな議論をやらせていただいた中で、基本的には一体の紙パックという事で表示しようというのが今の結論でございます。

日本製紙クレシア 蓋そのものが云々というより、我々が気にするのは裏側の糊でガッチリ止まっているところが気になります。やっぱり細くなっても糊ですから異物の一種になって、むしろ大きい方が取りやすいというのが設備的な事実でございます。

製紙メーカーとしては、リサイクルというのは責任を持ってやっていかなきゃいけないんですけど、複合素材であるとか、いろんな事が多様化してきてスピード感に中々ついて行けてないというのが正直なところなんです。その辺、少しスピード感を合わせていただければと思いますので宜しくお願い致します。

進行 失礼な言い方かもしれませんが、製紙メーカーさんと商品を開発される所とのコミュニケーションがどうなんだと感じます。新しいものが出る前

にお互いに情報が共有出来ると、消費者に対してとか、あるいは回収する業者の方に対しての情報提供の仕方もち



ちょっと違うのかなというよう気がします。国内循環の観点からは、輸出の問題もあるようですが。

日誠産業 紙パックをメインに古紙パルプに加工しています。紙パックの動向が商売の流れに大きく作用されますが、現状を申し上げますと、日本の紙パックは海外の方にも輸出されています。我々が調べた限りは、月間数百トンという単位。どの製紙メーカーさんも原材料が足りない状況だと思います。本来、紙を再生するという事ですので、プラスチックがない事に越した事ないのですが、物が無い状況では、そういった物でも受け入れないと自分達の材料が集まらなと。その辺り、各メーカーさんが、それぞれ工夫をしてるんじゃないかと思います。

環境省 基本的な考えとしては国内循環が望ましいと。ただ、個々の事業者の皆さんの活動そのものをそれで規制するという話ではないので、そこをどうやってバランスを取っていくのかというのは変わらない問題かと思っています。

最後にパネラーである各容器メーカーから、自社工場に出る損紙のリサイクル状況の報告があり、雪印メグミルクからは、CSR 活動への社内の反響状況等の報告がありました。

循環型社会というのは利便性も享受しながら、消費者は消費者としての責任を負うというのが当然の事と思われます。そうした視点からも、容器メーカーや乳業メーカーの消費者へのコミュニケーションの必要性を感じました。そして、様々な主体が情報共有できるような場を、業界自体が作っていただけると更に良いのではないかと感じるフォーラムとなりました。

【牛乳パックリサイクル・牛乳パック再利用マークについてのお問合せは】
全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 / 牛乳パック再利用マーク普及促進協議会
TEL:03-3360-1098 FAX:03-3360-7090 E-mail:info@packren.org
HP:www.packren.org 〒164-0003 東京都中野区東中野 4-6-7-201
牛乳パック 110 番●フリーダイヤル 0120-89-4704 パックでヨナオン 月～金曜日 11:00～16:00